2002年9月2日

セミナー通信　Vol．101

西村セミナールーム
主宰　西村　和彦

文部科学省の迷走

新指導要領の教科書がスタートしてまだ半年も経っていませんが、各方面から立ち上る野火のごとき「ゆとり教育への不安」の前に文部科学省は早くも方向転換を余儀なくされているようです。今回の指導要領から削減された３桁のかけ算や台形の公式を「発展的な学習」内容で教えるポイントを示した教師用の参考資料を作成したり、小中学校の中から理科・算数・数学の重点教育を行う学校を全国で200校指定することに決めたり、あまりの変わり身の速さにこちらがとまどってしまうくらいです。

基本的には何もしないよりマシかもしれませんので、方向としては歓迎できます。ただ、教科書は３～４年後の次回の改訂までは変わりませんから、今回の「発展的な学習」はあくまでも陰の指導要領であり、教科書という表に出ることはありません。入試での取り扱いも気になるところですが、何より２つの指導要領が学校現場でどのように扱われるのかがわかりません。

理数の重点校にしても、どこが指定されるのか、指定校は全員が理数を鍛えられるのか、指定校外地区からの越境を認めるのか、わからないことだらけです。

何よりこれらの方策は、公教育が「教育の機会の平等性」を放棄したような気がしてなりません。確かに個人の能力には差があるわけですし、それに合わせた教育は必要でしょう。でも才能のある生徒を一堂に集めて英才教育をするというような、昔の共産主義国のスポーツ選手育成のようなことはしないでしょうから、住む地区によって通う学校が決まる公立小中学校の場合、自らが望んでもそのチャンスを与えられない生徒が全国に数多く出てしまいます。

以前にも書きましたが、上位層をのばすには、ボトムアップが不可欠です。多くのスポーツでも、競技人口が多いものから世界に通用する選手が生まれてくるものです。高い山は裾野が広いものです。上位層しか見ない対策は、いかにもエリート官僚らしいとも言えますが。

日本の未来を担う若者に何を教育すべきか、難しい課題ですが、もう迷走しない舵取りを文部科学省にはとってもらいたいものです。

'02年度１学期通知表結果(中１・２：絶対評価、中３：相対評価)

9科目別平均		英語	数学	国語	社会	理科	5科目計	音楽	美術	保体	技家	9科目計
学年	1	5.0	4.8	4.4	4.1	4.2	**22.4**	3.6	3.6	3.5	3.9	**37.0**
	2	4.1	4.7	3.8	4.0	4.6	**21.2**	3.6	3.3	3.5	3.4	**34.9**
	3	4.8	4.7	4.5	4.4	4.4	**22.8**	3.9	4.3	3.8	4.0	**38.8**

５科目別内申評定割合（％）

	英語	数学	国語	社会	理科
5	**65**	**82**	23	32	41
4	**29**	**18**	59	53	47
3	**6**	**0**	18	15	12
2	**0**	**0**	0	0	0
1	**0**	**0**	0	0	0

９科目合計内申割合（％）

	'02	'01	'00	主な受験資格高校
40～45	**18**	32	32	旭丘 菊里
36～39	**41**	26	35	春日井
32～35	**32**	21	21	高蔵寺
27～31	**9**	13	12	春日井東
9～26	**0**	8	0	私立　他